

天道是邪非邪

伯夷・叔齊孤竹君之二子也。父欲立叔齊。及父卒。叔

齊讓伯夷。伯夷曰、「父命也。」遂逃去。叔齊亦不肯立而逃

之。国人立其中子。於是伯夷・叔齊聞西伯昌善養老。盍なんの益ぎ之。

往歸焉。及至西伯卒。武王載木主。号為文王。東伐紂。伯

夷・叔齊叩馬而諫。曰、「父死不葬。爰及干戈。可謂孝乎。以

臣弑君。可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰、「此義人也。」扶而

去之。

武王已平殷亂。天下宗周。而伯夷・叔齊恥之。義不食

周粟。隱於首陽山。采薇而食之。及餓。且死。作歌。其辞曰、

登彼西山兮。采其薇矣。

以暴易暴兮。不知其非矣。

神農・虞・夏。忽焉沒兮。我安適歸矣。

于嗟徂兮。命之衰矣。

遂餓死於首陽山。

或曰、「天道無親。常与善人。」若伯夷・叔齊。可謂善人者、

非邪。積仁潔行。如此而餓死。且七十子之徒。仲尼独薦

顏淵為好學。然回也。屢空。糟糠不厭。而卒蚤夭。天之報

施善人。其何如哉。盜蹠日殺不辜。肝人之肉。暴戾恣睢、

聚あつ党ムル数千人、横ニシテ行スル天下、竟ツヒニ以テ寿終ハル。是レ遵したが何ノ德ニ哉。此レ其ノ尤もつと。
大イニ彰しやう明めい較かう著ちよナル者也。若キ至リ近世、操行不軌、專ヲ犯ス忌諱、而終
身逸樂富厚、累世不絕、或ある扞ハ地而踏之、時アリテ然後出言、行ク
不レ由レ徑、非ズ公正、不レ發憤、而遇アフ禍災者、不レ可勝數也。余甚ダ
惑マ焉。儻ある所謂天道是邪非邪。
(伯夷列伝)

【書き下し文】

伯夷・叔斉は、孤竹君の二子なり。父叔斉を立てんと欲す。父の卒するに及び、叔斉伯夷に譲らんとす。伯夷曰はく、「父の命なり。」と。遂に逃れ去る。叔斉も亦立つことを肯ぜずして之を逃る。国人其の中子を立つ。是に於いて伯夷・叔斉西伯昌の善く老を養ふを聞き、盍ぞ往きて歸せざると。至るに及び、西伯卒す。武王木主を載せ、号して文王と為し、東のかた紂を伐つ。伯夷・叔斉馬を叩へて諫めて曰はく、「父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ。孝と謂ふべけんや。臣を以て君を弑す。仁と謂ふべけんや。」と。左右之を兵せんと欲す。太公曰はく、「此れ義人なり。」と。扶けて之を去らしむ。

武王已に殷の乱を平らげ、天下周を宗とす。而るに伯夷・叔斉之を恥ぢ、義として周の粟を食らはず。首陽山に隠れ、薇を采りて之を食らふ。餓ゑて且に死せんとするに及び歌を作る。其の辞に曰はく、

彼の西山に登り 其の薇を采る

暴を以て暴に易へ 其の非を知らず

神農・虞・夏忽焉として没しぬ 我安くにか適帰せん

于嗟徂かん 命の衰へたるかなと

遂に首陽山に餓死す。

或ひと曰はく、「天道親無く、常に善人に与す。」と。伯夷・叔斉の若きは、善人と謂ふべき者か、非ざるか。仁を積み行ひを潔くすること此のごとくにして而も餓死す。且つ七十子の徒、仲尼独り顔淵を薦めて学を好むと為す。然れども回や屢空しく、糟糠すら厭かずして、卒に蚤夭せり。天の善人に報施する、其れ何如ぞや。盜蹠は日に不辜を殺し、人の肉を肝し、暴戾恣睢、党を聚むること数千人にして、天下に横行するも、竟に寿を以て終はる。是れ何の徳に遵へるや。此れ其の尤も大いに彰明較著なる者なり。近世に至り、操行不軌、専ら忌諱を犯すも、終身逸樂富厚、累世絶えず、或いは地を扱びて之を踏み、時ありて然る後言を出だし、行くに徑に由らず、公正に非ずんば憤りを発せざるも、禍災に遇ふがとき者は、数ふるに勝ふべからざるなり。余甚だ惑ふ。儻いは所謂天道は是か非かと。

(伯夷列伝)

【口語訳】

伯夷・叔斉は孤竹君の二人の子である。父親は（弟の）叔斉を（自分の後に）即位させようと望んでいた。父親が亡くなった際、叔斉は（兄の）伯夷に（君主の位を）譲ろうとした。（すると）伯夷は言った、「父の命令である。（お前が即位すべきだ。）」と。（伯夷は）そのまま（国外へ）逃れ去った。叔斉もまた即位することを承知せずに国を去った。（孤竹の）国の人々は（やむをえず）二人の間に位置する子（伯夷の弟、叔斉の兄）を（国君に）立てた。そこで伯夷・叔斉は（後の周の文王）西伯昌が引退した者をよくいたわると聞き、（そこに）行って身を落ち着けずにいられようかと（考えた）。行ってみると、西伯は死んでいた。（西伯の息子の）武王は（父の）位牌を（車に）載せ、文王と諡して（父の威光を借り）、東へ向かって（殷の）紂王を討とうとしていた。伯夷・叔斉は（武王の）馬（の手綱）を引きとめて諫めていう、「父君が亡くなって葬儀もせず、そのまま戦争を行うのは、孝といえるでしょうか。（また、）臣下の身でありながら君主を殺そうとするのは、仁（者）といえるでしょうか。」と。（すると武王の）側近が二人を殺そうとした。（その時）太公（望呂尚）が「この人たちは義の人である。」と言って（二人を）助けて立ち去らせた。

武王はやがて殷の乱を平定し終わり、天下は周を天子としていただくようになった。しかし伯夷と叔斉はそうすることを恥辱とし、義をつらぬいて周の扶持米を受けなかった。（そして）首陽山に隠棲し、野豌豆を採って食べ（命をつないでい）た。餓えて今にも死ぬという時に歌を作った。その歌詞にいう、

あの西山（首陽山）に登り その野豌豆を食べ（て命をつないでい）る

（武王は）暴力でもって（紂王の）暴政にとって代わり その間違いに気がつかない

神農・舜・禹（のような古の理想的な君主とその政治）はあつというまに姿を消してしまつ

た 私はどこへ身を落ち着けたらよいのか

ああ、死んでしまおう（我が）命運も衰え尽きたのだなあ

かくて首陽山で餓死した。

ある人が言った、「天の意志にはえこひいきがなく、常に善人の味方をする。」と。伯夷・叔斉などは、善人というべき者か、そうではないのか。仁徳を積み行いを潔白にするさまは今述べたとおりであるのにそれでいて餓死した。そればかりか（孔子の弟子たちの中で、特に優れた）七十余人の人たちのうち、孔子はただ顔淵だけを推薦して学問を好む者だとした。しかしながら回（顔淵）はしばしば食物が乏しくなり、酒かすや米ぬか（といった粗末な食事）すら満足に食べられず、とうとう若死にした。天が善人に報いる（というが）、それはいかかであろうか。

（大盗賊）盗蹠は毎日無辜の人を殺し、人の肉をなますにし、道理に反した極悪なことや自分勝手なことをし、一味を数千人集めて天下にのさばったが、ついに天寿を全うした。これは何の徳によるものか。これらはその（矛盾の）最も大きく極めて明白な例である。近い時代においても、素行が道はずれ、ひたすら人間としてやってはいけないことばかりしていながら、一生安楽に暮らして財も豊かで、（しかも）代々（子孫が）絶えない者や、あるいは（その逆に）よく（仕官などをすべき）場所を選び用心して足を踏み出し、（発言すべき）時が来てそこで初めて（慎重に）発言し、歩む際に小道を通らず（いつも大道を歩むように公明正大にふるまい）、公に正しいことに関してでしか発憤しない（者）でも、禍い・災難に遭うといった者は、数え上げることができないほどである。（そこで）私は甚だ困惑する。もしかするとあの天道というものは正しいのか、正しくないのかと。